

# ワーキングメモリ理論と発達障害児等の学習支援

企 画： 日本発達心理学会第 28 回大会委員会  
講 師： 湯澤 正通 (広島大学大学院教育学研究科)

## [企画主旨]

文部科学省の調査資料によると、普通学級において「学習面で著しい困難」を示す児童生徒が平均数名いる。自閉スペクトラム症や ADHD の子どもたちは、見た目にも他の子どもとの違いがはっきりしているため、早期に見出され、支援方法の研究も進んでいる。現場の教員や特別支援を行う専門家も、それらの子どもたちが落ち着いて授業を受けることができるような環境の設定ができるようになってきている。

一方で、次の課題は、それらの子どもたちや学習障害の子どもたちの学力をどのように伸ばし、将来の就労につなげていくかである。この課題解決に関して、学校の教師も、臨床発達心理士等の資格を持たれている方々も、模索を続けている。その課題解決の手がかりとして、最近、注目されているのが、実行機能またはワーキングメモリ (Working Memory: 以下、WM) である。WISC-IV の中に、WM 指標が取り入れられてから、特別支援の領域では、WM への関心が高まっている。実行機能は、発達障害と関わっており、中でも、WM は学習と密接に関わっていることが分かっている。今回の大会では、そうした研究の最新の動向について、大会委員会企画シンポジウム「ワーキングメモリ理論から発達障害へのアプローチの進展」で取り上げる。こうしたテーマに興味を持たれている方は、こちらのシンポジウムにも参加していただきたい。

おそらく、発達心理学会会員の方の多くは、WM と聞くと、記憶の基礎研究というイメージを持たれているかと思う。確かに、WM 研究は、膨大な記憶の基礎研究を土台にしている。しかし、だからこそ、その強固な基礎研究の土台のうえに、臨床的な研究を発展させることができる強みがある。

本チュートリアルでは、「ワーキングメモリとは」といった入門的なところから始める。次に、WM (実行機能) の発達における大人の役割について説明する。その後、WM のアセスメントとその事例に関して紹介する。

筆者を中心とした広島大学の研究プロジェクトでは、発達障害児の支援や教育を行う方々を対象に、インターネット上で児童生徒の WM のアセスメントを行い、その児童生徒の支援についての情報を提供する活動を行っている。これまで 250 ケース以上の児童生徒のアセスメントを行い、情報提供を行ってきた。一般的な傾向としては、言語領域の WM が弱いと読み書きに遅れが見られ、視空間領域の WM が弱いと、書きや算数に遅れが見られる。しかし、WM に問題がなくても、読み書きに遅れがある児童生徒もいる。そのような場合、児童生徒の家庭や生活習慣に問題があったり、読み書きの遅れが ADHD や ASD によるその児童生徒独自の発達特性に起因していたりする。WM に弱さがある場合、学習の遅れは、当該児童生徒の WM が情報のオーバーフローを起こしているためであり、それに対応した支援を行うのが効果的である。他方、そうでない場合、児童生徒の生活環境を改善する働きかけや、発達特性に応じた支援が必要である。

本チュートリアルは、WM 理論の「初学者」を想定した講義形式を中心で行う。本チュートリアルをきっかけに、発達心理学会会員の方には、WM = 「基礎研究」というイメージから、WM = 「基礎研究」 + 「臨床研究」というイメージへ変えていただくことを期待している。

## [講師紹介]

略歴：1992 年広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了 (博士 (心理学))。鳴門大学助教授、広島大学助教授を経て、2007 年より、広島大学大学院教育学研究科教授 (現在に至る)。

専門領域：教育心理学、発達心理学。最近は、ワーキングメモリ理論を生かした学習支援。

最近の著書・論文：『ワーキングメモリと教育』(編著、北大路書房、2014 年)、『日本語母語幼児による英語音声の知覚・発声と学習』(共著、風間書房、2013 年)、『ワーキングメモリと特別な支援: 一人ひとりの学習のニーズに応える』(共著、北大路書房 2013 年)、「クラスでワーキングメモリの相対的に小さい児童の授業態度と学習支援」(共著、『発達心理学研究』24 巻, Pp.380-390. 2013 年)。